

溺死する女

中 島 淑 恵*

1. はじめに

ラフカディオ・ハーン (1850~1904) の代表作である『怪談 (Kwaidan)』は、ハーンの没年となった1904年の4月、ホートン・ミフリン社から出版された。ハーンはこれを喜び、6月には坪内逍遙に一部を献呈している。この時期のハーンは、前年の帝大解任の失意から立ち直り、早稲田に招聘され、3月から7月にかけて英文学史と詩人批評を講じながら、逍遙の知遇を得て日本の演劇を英語圏に翻訳紹介したいという新たな希望を抱いていた。また、アメリカやイギリスの大学から、日本についての講演や講義を依頼されることも一度ならずあった。残念ながらこれらの新たな展望は、ハーンが9月に急逝したことにより中断されてしまったが、結果的に『怪談』が、ハーンの生前最後の出版物となったことはある意味象徴的でもある。

ハーンは『怪談』というタイトルを、英訳せずに当時の発音そのままに『Kwaidan』とした (図1)。日本語のわからない欧米の読者にとっては、表紙を一瞥しただけでは、いったい何のことなのかわからないという謎めいたタイトルである。表紙をめくるとようやく、「不可思議なことどもの物語と研究 (Stories and Studies of Strange Things)」という副題が目に入り、「怪談」とはどのようなものなのか想像されることとなる (図2)。日本人の心性を知るためにはこのような物語から日本人が何に「おそれ」を抱くのかということを知るのも一つの方法であり、前書きによってハーンがそれを企図したことが明かされる。ハーンはさらに前書きのなかで、「怪談」を「奇妙な物語 (Weird Tales)」とも述べている。このような不可思議かつ奇妙な物語は、19世紀欧米で流行した幻想小説の流れをくむものでもあり、フランスでいえばシャルル・ノディエ (1780~1844) に端を発し、オノレ・ド・バルザック (1799~1850)、テオフィル・ゴーティエ (1811~1872) と続く系譜がある。余談ではあるが、ヘルン文庫にはこれらの作家の作品が収められており、とりわけゴーティエの作品にはおびた

だしいメモ書きがあって、ハーンが愛読した形跡が認められる。ハーンの処女出版物が、ゴーティエの短編小説のいくつかを集めたものであることを記憶しておいてもよいだろう¹⁾。英語圏では当然ながらエドガー・アラン・ポー (1809~1849) の奇譚の数々に関心を抱き、ヘルン文庫にもその全集が収められているほか、東京帝国大学での講義でも熱心にポーについて語るハーンの姿を見出すことができる。

今回は、ハーンの名を不朽のものとした「怪談」あるいは「奇談」からいくつかのエピソードを紹介し、ハーンが英語圏の読者に対して日本人の心性を理解させるために、なぜ、「滑稽譚」のようなものではなく、もっぱら「怪談」を紹介しようとしたのかについて考察してみたい。それが日本人固有のものであっても、読者である欧米人にとって理解可能なもの、納得の行くものである必要があるだろう。ハーンが「怪談」を紹介することによって読者に求めたのは、あまねく人間にとって、いったい何が「おそれ」を抱かせる要因なのか、ということ問いかけることだったのではないと思われるからである。

このような「怪談」「奇談」のなかでとりわけ鮮やかに描き出されるのは、男女の別でいえば女性である。「ろくろ首」や「むじな」に登場する「化け物」が滑稽味を帯びた「男」であるのに対して、「女」とりわけ「死美人」すなわち「幽霊」は、「おそれ」を抱かせる動機としてハーンの物語の随所に登場する。それを一言でいえば、西洋の伝承の彼方からほのかに立ち上る「幽霊妻」の系譜に連なる女性たちであり、実は典拠のわからない「雪女」もまた、この系譜に位置づけられる存在であるように思われるからである²⁾。

2. 水死する女

いわゆる「怪談」は、1904年発表の『怪談』に収められているだけでなく、ハーンのエッセイや創作の随所にちりばめられているのであり、とりわけ晩年の『怪談』に結実する物語は、それ以前の著作のなかに小さなエピソードとして前駆的に見出される場合が多い。したがってここでは、『怪談』に収められた物語だけではなく、ハーンの著作から、「怪談」と思われる「不可思議な物語」を紹介することにする。

* Toshie NAKAJIMA
富山大学人文学部
〒930-8555 富山市五福 3190
E-mail: toshie@hmt.u-toyama.ac.jp

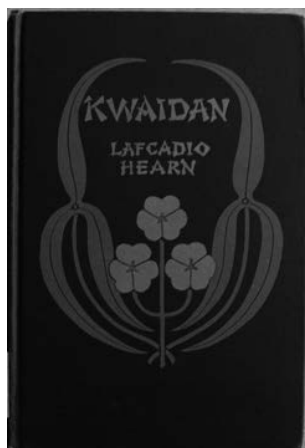


図1 『怪談』(1904年)の表紙
(富山大学附属図書館ヘルン文庫蔵)

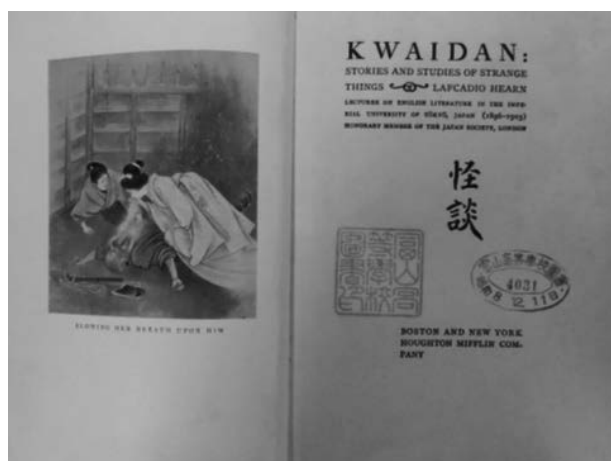


図2 『怪談』の見開き
(富山大学附属図書館ヘルン文庫蔵)

はじめに、ハーンの著作のなかに印象的に浮かび上がる「水死する女」について見てみたい。まずは、来日後第一作である『知られざる日本の面影 (Glimpses of Unfamiliar Japan)』³⁾に収められた「神々の国の首都 (The Chief City of Province of the Gods)」から、「嫁が島」の伝承が紹介されている箇所を紹介したい。

朝靄のたなびく宍道湖の美しい情景のなかで、「半マイルほど先 (half a mile away)」に神社のある細長い島がある、と記述は始められる。それは「雄弁と美の女神 (the Goddess of Eloquence and Beauty)」と説明される「弁天 (Benten)」に捧げられた島で、「嫁が島 (Yome-ga-shima)」すなわち「若い妻の島 (The Island of the Young Wife)」である。その名の由来は「ある夜、音もなく夢のように (noiselessly as a dream)、湖の深みから「溺れた女の死体 (the body of a drowned woman)」が浮かび上がったが、それは「実に愛らしく、実に信心深く、そして実に不幸な (very lovely, very pious, and very unhappy)」女であった。人々はこれを憐れんでこの島を弁天に捧げ、祠を立ててこの溺死した女の遺骸を葬ったのだという (WLH; 第5巻174頁)。

ハーンがここで述べているのはただこれだけであり、女の素性や溺死の理由などは述べられていない。今日の嫁が島伝説に見られる、「姑にいびられ人目を忍んで実家に逃げ帰る途中小用を足して氷が割れた」などの枝葉は、おそらく後年付け加えられたものであろう。そのような枝葉が取り払われているからこそ、この女の水死体は文字どおり「夢のように」人々の記憶に焼き付けられるのであろうし、また、女の衣服や容姿についての記述がないからこそ、人種や文化の壁を超えて普遍的な「女」の姿が「夢」としてすなわち「幽霊」として欧米の読者の脳裏にも明確なイメージを結ぶのではないだろうか。

水死する女といえもう一つ、忘れがたい女の描写が、1899年出版の『霊の日本 (In Ghostly Japan)』に収められた「焼津」のなかに見られる。乙吉夫婦と海水浴の帰りがけに話していた「私」は、「恋のために」⁴⁾泳いだ女の伝承を乙吉から聞かされる。娘は「羽島娘 (Hashima girl)」とよばれ、その伝承を乙吉が語ることになる。乙吉によれば、「羽島娘」は漁師の娘で、数里離れた網代に恋人がいて、夜、彼を訪ねて泳いで行き、朝には泳いで戻ったのだという。恋人の男は彼女を導くために松明を燃やしていたのだというが、ある暗い夜、それを忘れてしまったか消えてしまったので、彼女は道を見失って溺れてしまったのだという。乙吉は、これは伊豆ではよく知られた話だと付け加える。「私」は即座に、「極東では、泳ぐのは実にかわいそうなヘーローなのだ (in the Far East, it is poor Hero that does the swimming)」そして、このような状況では、「西洋におけるレアンドロスに対する評価は、どうなるのだろうか (what [...] would have been the Western estimate of Leander?)」と自問する。ここでいささか唐突に付け加えられた感のあるこの自問は、ギリシア神話のヘーローとレアンドロスの逸話を知らない者にとっては意味がわからないのではないだろうか。すなわち、平井訳では訳者注で説明されているとおり、ギリシア神話においては、愛の美神アフロディーテに仕える巫女であるヘーローという恋人の元に泳いで通うのは青年レアンドロスであり、神に仕える身ながら恋する女となったヘーローは恋人を迎えるために塔に松明を焚いて待つのであったが、ある嵐の夜に松明は風に吹き消され、レアンドロスは方向を見失って溺死、これを嘆いたヘーローも塔から身を投げて自害するという物語である。すなわち、ギリシア神話では娘は青年に口説かれて恋する身となっており、また、逢瀬のために危険を冒して泳いでくるのは青年のほうであるということになる。ギリシア神話のことであるから、巫女に恋をするという禁を冒したこの青年に、アフロディーテの神罰が下ったという理由づけもできるだろう。

この物語は、「焼津」では乙吉の口から語られた伝承という体裁をとっているが、本当に当時の伊豆の網代あ

たりで「有名」な物語だったのであろうか。「私」が独りごちするヘーローとレアンドロスの物語と主人公の性別は反転しているものの、あまりにもそれに酷似しているとはいえないだろうか。また「焼津」では、この会話は海水浴から戻る「私」を迎えに来た乙吉夫婦との会話として展開されるが、その端緒は、「お盆には海で泳ぐべきでない」という神罰を思わせる乙吉のおかみさんのたしなめから始まるのである。

ところでこのヘーローとレアンドロスの物語は、欧米ではオヴィディウスの『名婦の書簡 (Heroides)』によって、とりわけ19世紀にはよく知られるようになった恋物語であり、レアンドロスよりはヘーローの姿のうちに「宿命の女 (femme fatale)」の姿が見出されて、絵画や演劇等でしばしば取り上げられた物語である。たとえば絵画では、ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー (図3) やバーン・ジョーンズ (図4)、あるいはフレデリック・レイトン (図5) がヘーローの姿を印象的に描いているし、音楽では、フランツ・グリルパルツァー (1791~1872) の悲劇「海の波恋の波 (Des Meeres und der Liebe Wellen)」や、フランツ・リスト (1811~1886) の「バラード第2番口短調」もこれに想を得たものとして知られている。

「宿命の女」は19世紀欧米の文学・美術・音楽の世界を席卷した女性像であり、「つれなき美女 (dame sans merci)」ともよばれ、恋した男を破滅させる美女として構想される。カルメンやサロメ、マノン・レスコーな



図3 ターナー『ヘーローとレアンドロス』(1837年)



図4 バーン・ジョーンズ『ヘーロー』(1886年)



図5 フレデリック・レイトン『ヘーローの最後の眺め』(1890年代か?)

どがその典型とされるが、ハーンもまた、そのような時代の風土のなかに生きた西洋人であったことを忘れてはならないだろう。確かに、「雪女」の容貌としては唯一の描写である「美しいがぞっとするような目つき」のなかに、この「宿命の女」の類型を見出すことは可能である。

ところで、「焼津」の逸話の場合、恋しい男を思って海を泳いで渡るのは女性のほうであり、「宿命の女」の類型というよりは、一心に恋に走る純な娘の恋情に「私」が思いをはせているという体裁を取っている。それが平井訳のような洒脱な「惚れた」ためであっても、字義どおりの「性交する (make love)」ためであっても、いわばスタンダール (1783~1842) の言う「肉体的恋愛」の好例であることもまた、記憶されておいてよいであろう。ハーンは、さまざまな物語を日本の原典から再話して織り直したばかりでなく、同じようにさまざまな西洋の神話や物語をそのなかに織り交ぜながら自らの物語を創作した。ここで言及したオヴィディウスの『名婦の書簡』もスタンダールの『恋愛論』も、ヘルン文庫の蔵書には仲良く肩を並べて眠っているのである。

3. 『チータ』水死する母と娘の物語

ハーンの最初の小説である『チータ (Chita)』(1889年) は、水死体が横溢する物語である。というのも、主人公のチータは、もともとはメキシコ湾のデルニエール島を襲ったハリケーンによって難破した船に乗っていたフランス人医師夫妻の子どもだからである。この物語はまず、舞台となるデルニエール島の情景描写から始められるが、海岸であらしになりそうな風の音を聞いているうちに、「私」はふと「ブルトンの奇妙な幻想 (a singular Breton fancy)」を思い出す。すなわち、「海の声は決してただ一つの声ではなく、たくさんの声の喧騒 (the Voice of the Sea is never one voice, but a tumult of many voices)」なのであり、それは「溺死者たちの声 (voices of drowned men)」なのであって、「夥しく多

くの死の囁き (the muttering of multitudinous dead)」であり、「数えきれない幽霊のうめき (the moaning of innumerable ghosts)」なのだという (WLH; 第4巻 154頁)。

このあと物語は、チータ一家の乗り込んだ船が難破する嵐の晩の回想となり、船は難破する。明るくなって海上に漂う漂流物や遺骸の惨状のなかで、掠奪者のならず者たちがいち早く船を出して獲物を物色する場面が展開されるが、獲物として目をつけられるのは、まずは豪華な衣装が目につく若い女性の溺死者である。それはたとえば、ならず者たちがクレオール言葉で「なんと美しい花嫁だ (Che bella sponisa)」と叫ぶような女で、目に付く結婚指輪やダイヤの耳飾りなどの装身具が手荒にもぎ取られることになる。これはチータ一家に起きた物語の前触れのような記述で、これに続く第2部では、養父となる漁師のフェリユーによるチータ発見の場面が長い前置きのあとに展開する。フェリユー一行は、メキシコ湾河口で夥しい数の水死体を目の当たりにするが、そのなかでまず2体だけはっきりわかる遺体として描写されるのが、「白いエプロンを付けた身なりの良い黒人女 (a negro, apparently well attired, and wearing a white apron)」と「青い衣装を着ている若い有色人種の娘 (a young colored girl, clad in a blue dress)」で、「うつぶせに浮いて (floating upon her face)」いる、風体から見て女中であると判断される (WLH; 第4巻 189頁)。そして、このような惨状のなかで、「キラキラしている金髪の輝き (a gleam of bright hair)」によって発見される「生きた子ども (a living child)」がのちにチータと名づけられる子なのである。同時に発見されたのは「死んだ母親 (a lifeless mother)」であった (WLH; 第4巻 190頁)。「いたいけな子ども (the frail creature)」は「絹のスカーフでしっかりと母の身体に結わえ付けられ (bound to the mother's corpse with a silken scarf)」でいて、死んだ母とはといえば「まるで死と同じように強い力で (with the one power which is strong as death)」あたりを漂う玉突き台にしっかりとしがみついていた。フェリユーが引き離そうとすると子どもは「ママン、ママン (Maman! Maman!)」と泣き叫んだが、ようやくのことで子どもを母親から引きはがし、陸へ連れ戻すことができた (以上、WLH; 第4巻 191頁)。

この救出の場面は、物語の展開からすれば重要な場面であるといえるかもしれないが、いささか冗長かつ詳細に過ぎるようにも思われる。『チータ』はハーンの処女小説であるが、小説としての完成度の評価は決して高くない。これに続く中篇小説『ユーマ』の2作を除いては、ハーンがその後中篇小説を書いていないのも、この2作が小説として必ずしも成功していないためであるかもしれないが、それはこのように物語の進行を遅らせてまで長々と描写される細部と物語全体との不均衡のためであるかもしれない。とはいえ、このような細部に、の

ちの物語と通底するさまざまな描写を見出すことができるのもまた読書の楽しみといえるのではないだろうか。

のちにチータの母の遺骸は、さらに無残な姿となって後日発見される。それは「判別できないほど変形した (disfigured beyond recognition)」遺骸で、「その細い指の骨も、海鳥についばまれて肉が削げ落ちていた (the slender bones of the hands had been stripped by the nibs of the sea-birds)」が、左手の薬指だけは金の指輪でお守りのように保護され、肉が残っていたよう (seemed to have been protected by a ring of gold, as by a charm)」だったのである。この結婚指輪に刻まれた、「1851年7月 (JUILLET, 1851)」という日付と「アデル+ジュリアン (Adèle+Julien)」という夫婦の名前から、これがフランス人医師ジュリアン・ラ・ブリエールの妻の遺体であることが特定される。これに先立って発見された、持っていたハンカチに A.L.B という頭文字の縫い取りのあった幼児の遺体がアデルの子ということにされた (WLH; 第4巻 205頁)。夫のジュリアンも行方不明で、やがて住まいであったニューオリンズの墓地にそろって墓碑が建てられることになる。ところがジュリアンは生き延びていて、娘のチータとのちに再会する、というのが物語の筋なのであるが、ここではとりあえず割愛する。

ところで、チータの名前の由来について、漁師夫妻が先に亡くした息子の名前をつけたものであることが詳述され、チータは本当の名前である「ユーラリー (Eulalie)」を一度もうまく発音できないことが繰り返し述べられているのに対して、本当の両親のジュリアンとアデルの名前は、一見偶然名づけられたようであり実はそうではないのかもしれない、と思わせるものがある。とりわけ妻アデルの名は、かのヴィクトル・ユゴー (1802～1885) の下の娘の名だからである。ユゴーには娘が2人あり、上の娘レオポルディーヌは新婚早々の19歳の時、セヌ川で事故のため溺死してしまう。下の娘アデルはのちに不幸な恋によって新大陸に渡り、放浪と狂気の生涯を送る。『チータ』が書かれた時代、アデルの後日談は世に知られていなかったにせよ、ユゴーの妻の名であり、下の娘の名でもあるアデルは、少なくともハーンのなかではやはりユゴーと結び付けられて記憶されていたのではないだろうか。

4. おわりに代えて

このようにして見てくると、ハーンの処女小説『チータ』においても、「水死する女」は、老若男女いたはずの遭難者のなかでもことさらに詳しく描かれ、とりわけ主人公となるチータの母の姿は無残なまでに詳述されていることがわかる。ハーン作品の一部を読むだけではこのことはわからないが、アメリカ時代の著作から通してハーン作品を読み直すと、一見全く異なる物語の間に見出される共通点、たとえばこのような興味深い一貫性に

気づかされることも実はよくあることである。

そして、このような「水死する女」もまた、「宿命の女」と同じく19世紀末欧米の文化のなかではひととき異彩を放ちながら目立つ存在でもある。たとえばハーンは、ジョン・エヴァレット・ミレー（1829～1896）の『オフィーリア』（1851～1852年制作；図6）を英国時代に目にしたかもしれないし、遭難者の死体が写実的に描かれたテオドル・ジェリコー（1791～1824）の『メデューズ号の筏』（1818～1819年制作；図7）に始まるロマン主義絵画におけるさまざまな死体の絵画に興味深く見つめたかもしれない。とりわけアメリカの事件記者時代には、死体安置所まで詰めかけて犯罪や死体の描写に心を砕いていたハーンであるから、常ならぬ水死体にとりわけ関心を抱いたとしても不思議はない。またハーンは、詩人としてのユゴーを深く愛していて、その詩集も熟読していた様子がヘルン文庫の蔵書からも伺われるが、なかでもとりわけ19歳で溺死した娘のレオポルディーヌに捧げる詩に惹かれていたようである⁵⁾。また、ハーンと同年齢でハーンも愛読していたモーパッサンが、同じく溺死者にまつわる奇妙な物語を書いていることも思い出しておいてもよいだろう。

ところで、物語の本筋からいえばディテールということになるのかもしれないが、「耳なし芳一」における平家の運命もまた遭難者のそれである。冒頭の一節は、源平の壇ノ浦の合戦を知らない欧米の読者のためにハーン

が付け加えた導入であるが、この一節があることによって、平家の運命、そしてその恨みの深さが、日本の歴史を知らない読者にもまず前提として了解されることになる。すなわち「かつては、平家の人々は今よりももっとずっと騒がしかった（In former years the Heiké were much more restless than they now are）」のであり、「夜通る船に乗りかかって沈めようとしたり（They would rise about ships passing in the night, and try to sink them）、いつでも泳いでいる人を見張っていて（水底へ）引っ張りこもうとする（to pull them down）」のである（WLH；第11巻161～162頁）。原話とされる『臥遊奇談』の「琵琶秘曲泣幽霊」では、この箇所について「月明かなれば海面にあやしき声をきゝ、雨しきる夜ハ平砂に鬼火を飛ばす」とあるのみで、それ以上の詳しい記述はない（図8）。

芳一が墓の前で壇ノ浦の合戦のくだりを語る場面でも、安徳天皇入水の場面でクローズアップされるのは、「美しく力なき者の運命（fate of the fair and helpless）」であり、「女子どもの哀れな最期（piteous perishing of the women and children）」と「腕に幼い帝を抱いた二位の尼身投げの段（the death-leap of Nii-no-Ama, with the imperial infant in her arms）」を語るときには、「聴衆は一斉に苦悶を示す長い長いうめきを一同に発した（all the listeners uttered together one long, long shuddering cry of anguish）」（WLH；第11巻167頁）とある。このくだりでも原話は、「一門入水の篇にいたりて男女感泣して其声しばしばやまざりけり」とあるのみで、とりわけ女性や幼帝が強調されて描かれているわけではないことがわかる。この場面を描くとき、あるいはこの物語を妻セツから聞かされたとき、ハーンの脳裏にはかつて描いた『チータ』の遭難場面や母娘の発見の場面などが去来したのではないだろうか。それを思い描きながらハーンの子作品の各所にちりばめられたディテールをたどるのは、ハーンを読む楽しみの一つでもある。ハーンの「怪談」は、単なる日本の伝承の再話ではない。ギリシア神話以来、古今東西の物語の教養をバック



図6 ジョン・エヴァレット・ミレー『オフィーリア』（1852年）



図7 ジェリコー『メデューズ号の筏』（1818～1819年）



図8 『耳なし芳一』のもととなった『臥遊奇談』（富山大学附属図書館ヘルン文庫蔵）

グラウンドとして、欧州からアメリカ、しかも、少なくとも当時はドイツ語圏であったシンシナティからフランス語圏であったニューオリンズ、さらには全く異質のクレオール文化花開くマルティニークを巡り歩き、現地での取材も怠らなかったハーンだからこそ、そこに世界の広がりがちりばめられているのである。そのすべてを楽しむことができるのは、後世の読者に与えられたハーンからの贈り物だということもできるのではないだろうか。

注

- 1) ハーンはニューオリンズ時代の1882年4月、ゴージェの短編小説のいくつかを英訳した『クレオパトラの一夜とその他幻想物語集 (One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances)』を、ニューヨークのR. ワージントン社より自費出版している。
- 2) 「雪女 (Yuki Onna)」は、ハーンが『怪談』の序文のなかで、「武蔵の国、西多摩郡調布村の百姓」が語ってくれた伝承だと断っているにもかかわらず、『怪談』に収められた物語のなかでは珍しく典拠が特定できない物語

で、実は日本の伝承の再話ではないのではないかというのが今日の定説である。

- 3) 以下、邦題は原則として、小泉時・小泉凡共編『増補新版文学アルバム小泉八雲』(恒文社, 2008年)によるが、読者諸氏にはなるべく原典を参照していただきたいという思いからハーンの原題を添えさせていただくことにする。関心を持たれた方には、ぜひ英語の原文で物語を再読されることを強くお勧めする。なお、以下ハーンの原文の引用は、フートン・ミフリン社刊の全集『Works of Lafcadio Hearn』(Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1922) 全16巻により、これをWLHとして巻数と頁数のみを示すことにする。
- 4) 平井呈一は「惚れた時さね」とこなれた訳を提示しているが(『日本雑記他』176頁; 恒文社, 1975年)、実際には「性交する (make love)」という直接的な表現が用いられている(第9巻365頁)。これも、ハーンを真に理解するためにはぜひ原文で読んでいただきたい理由の一つであるが、今日一般によく知られている平井訳は、とりわけこなれた達者な日本語で訳され、しばしば意図的な変更も施されているので、ハーンの原文の真意が伝わりにくくなっているさらいがある。
- 5) ハーンは東京帝国大学での講義などで子どもを亡くした父親の心情を表す詩について繰り返し述べている。これについてもいずれ機会を見てご紹介したいと思う。

(原稿受付け: 2019.11.15)